

明星大学に支えられて

日野市教育委員会 教育長 米田裕治

「ひとは多様な存在である」。このことを受け止められる感性と共生力を育むことほど困難なことはない。幼少期や児童・生徒期に多様な仲間と生活し、遊び、学び、創造的な活動を積み重ねる風景が日常のなかになければ育まれるはずがない。理論や哲学をこえた皮膚感覚・細胞感覚の「ひとの力」である。

日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟

日野市では「発達障害のある子にとって参加しやすい教育環境、わかりやすい授業はすべての子にとって参加しやすい教育環境、わかりやすい授業である」という仮説（信念）のもとに「ひのスタンダード（ユニバーサルデザイン化）」に取り組んでいる。

平成22年8月、『通常学級での特別支援のスタンダード』が発刊された。編著者は、日野市立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟。小貫悟先生と約650名の日野の教師全員の実践から産み出された著作物である。**つますき**（学習、社会性、注意、言葉、運動、情緒）、**授業・指導方法のスタンダード**（時間の構造化、情報伝達の工夫、参加の促進、内容の構造化、授業の中でのユニバーサルデザインの実践方法）、**学級環境のスタンダード**（場の構造化、刺激量の調整、ルールの明確化、クラス内の相互理解の工夫）、**学校環境のスタンダード**（組織作り、理解・啓発、発見、把握・分析、評価、引き継ぎ、連携、学校環境維持のための校内委員会の年間スケジュールモデル）、**地域環境のスタンダード**（専門家チーム、巡回相談、就学・進学システム、研修システム、専門機関との連携、行政システム間の連携）。平成17年度から日野市の現場に入られた小貫悟先生と教員の実践から導き出された理論と、教師からの450点を超える実践事例、実践コラム、現場で使用される書式資料が掲載されている。

その後私たちの全小・中学校は授業実践・研究の中核にユニバーサルデザイン化をすえ日々積み重ねを行ってきた。校長会、副校長会の共同研究においても常に中心テーマとなっている。（例えば、平成25年度日野市公立小学校副校長会調査研究主題「通常学級での特別支援教育のスタンダードの定着にむけた学校づくり—副校長の役割—」）。

そして、平成27年3月に、すべての子どもが参加でき、理解・習得・活用できる学力を育む授業づくり、授業のユニバーサルデザイン化についての現到達点として『ひのスタンダード second stage 完成版 UD 授業の組み立て方』がまとめられた。

「なるほど わかった 感動した」この明確な山場を焦点化し、そこへの道筋を組み立てていく。展開の構造化を図り、今まで培ってきた視覚化、スモールステップ化、身体性の活用等の方法や技術を活用した実践に挑戦してきた。

この報告書には17小学校中ほぼ全小学校、中学校全8校の研究授業実践事例が掲載されている。

そして小・中の全学年にわたるように、また全教科（中学は多数の教科）にわたるように編集されている。指導案、全体への支援、個別に予想されるつまずき、個に応じた手だて、個に特化した指導表、授業の構造イメージ図、協議会で話し合われた改善点、小貫悟先生からの助言、そしてどのように改善したか、研究事業の成果、これらが掲載され、全教員に配布され共有化された。

私たちのこれからの道筋についてあらためて考えてみよう。

まず第一に、教師自身が教科、領域の本質的な理解にたどりついているか。単元がねらう本質の理解にたどりついているか。

授業において子どもたちがその本質にたどりつく過程は一人一人違う、むしろ違うことによつて学びや気づきは厚みを増し従来のねらいをこえた果実や活動が呼び起こされる。

ユニバーサルデザイン化によって、このようなそれぞれの子どもの特性をいかしたダイナミズムが展開される授業が志向されているか。ユニバーサルデザイン化を形式としての方法や技術の理解におちいつてはいないか。

これらを吟味しつつ「探究のたのしさ」「問いのたのしさ」の学びの世界にいざなっていく。「問いを深める力を育む」学びをめざしていくのである。

「包み込むモデル」

小貫悟先生は当初から「包み込むモデル」を提唱され、私たちはそのモデルの理念に近づくべく実践を行ってきた。

発達障害をもつ子どもの特性に応じた個別的配慮のなかにすべての子どもの育ちや発達に必要な配慮、働きかけの一般化されるべき要素（真理）がある。

子どもによっては自らの力で乗り越えられる子もいれば支援が必要な子どもいる。しかし人は多かれ少なかれ同質の困りごとをかかえている。

「包み込むモデル」は、「個別的配慮・子ども」を中心に置き、それを包み込む層を順に「指導方法」「学級環境」「学校環境」「地域環境」と設定する。そしてそれぞれの層でいかなる工夫をするべきか解き明かしていく。

学校環境では校内委員会の体制（構成メンバー）、学校内の他の委員会との情報共有、個々の子どもの理解を深め共有する仕組みづくり、リソースルーム^(※)の展開。地域環境では学校への巡回相談、専門委員会、就学（進学）相談委員会、特別支援教育研修など。

このことによってめざしたのは、子どもたちの日常集団のなかに多様な特性を持つ子どもがいて、多様な仲間たちが生活し、遊び、学び、創造的な活動を積み重ねる風景をスタンダードにするということである。

その仲間集団がすべての子どもにとって安心のベースキャンプとなり、一人一人の元気が育まれる。すると子どもたちはそれぞれ自らの命題にしたがってチャレンジを始める。そしてそのチャレンジを支援する多様なプログラムが用意されている。

元来、人の集団には多様な人がいる。私たちがめざすべきは、一人一人が多様な自らの文脈で豊かになっていくこと。そして、多様な人々が協働で知恵をだし工夫をすることによって英知が生まれ、新しい価値が生まれ、良き社会に向かうということである。

私たちの子どもたちは民族、宗教、文化、風土の多様性を受け止め、地球規模で困難な課題を

解決していかなければいけない存在である。もっとも支援が必要な存在を基準点にする視座を財産として、すべての人が安心とチャレンジのベースキャンプに立つことができるユニバーサルデザインの環境づくりへ。地球規模の共生力へ。

教育基本法前文にある世界の平和と人類の福祉の向上に寄与する力を育む環境づくりをめざして明星大学小貫悟教授にご教授いただいた「包み込むモデル」に一步でも近づくことができるよう、日野市の現場は模索奮闘の毎日である。

「世界は多数 地球は一つ」

文化人類学者、言語学者 西江雅之さんのことばより

※「学校環境」「地域環境」を把握するためにはリソースルームシステム（通常の学級に在籍する児童・生徒で発達障害などで学習に困難を抱えている子どもに対し週1時間程度その子にあわせた学習支援を個別に行うシステム）をはじめ平成26年4月に開設した日野市発達・教育支援センター（福祉と教育が一体となって相談及び支援を行い、ゼロ歳から18歳までの子どもの育ちを切れ目なく支援を行う機関）について述べなくてはならないが別の機会に譲りたい。